藤子・F・不二雄『未来の想い出』

臨床文藝医学会理事（内科医）

『未来の記憶』という藤子・F・不二雄原作の映画があったなと思い、調べてみると思い違いで『未来の想い出』だった。私は映画のほうを子供の頃に観ただけで、原作のほうは読んだことがなかった。原作の主人公は男だが、映画のほうは女性が主人公となっており、過去へ引き戻されるのは売れない漫画家の女性と結婚してから変貌してしまった夫のもとで道を誤ったと後悔しているような女性の二人となっている。監督は『家族ゲーム』の森田芳光である。私は映画や文章を見返しながら、再現するのが下手くそで面倒になり途中で放り出してしまいたくなるので、最初から印象だけで話すことにする。だから思い違いもあるだろう。事実に合わないところがあれば、この人は間違っている、と思っていただければよいだろう。

主人公は心臓麻痺で倒れ、漫画家を目指して上京し下宿を始めたばかりのまだ若かりし日へと連れ戻される。主人公は最初は以前経験した未来の記憶をおぼろげにしか思い出せないが、あるとき自分が、心臓麻痺で倒れ 20 代の若い日へ引き戻されるという円環を繰り返していることに気づく。主人公は未来の記憶を頼りに、ヒットした漫画を描いて一躍時の人、売れっ子作家となる。映画版では工藤静香が演じる女性は飲み会で気になっていたほうの男性と結ばれ、別の人生を歩む。未来の記憶を保持したまま、二人は心臓麻痺で倒れることなく、無限の円環から解放される、最後はそのようにして終わる。原作でも主人公は愛する女性と結ばれて、心臓麻痺で亡くなることなく無限ループから逃れることができたようだ。

それで何が言いたいの？と思われるかもしれない。時間の話をしたいの？と。私は時間の話もしたくないし、何も言いたくない。ただ未来の想い出の話がしたかった。何がいいかと言われると、わからない。映画がいいのは、映画にはその内容以上に、現実のもつ強度というか、強度という不確かさがあるように思う。映画でなくても、その描画の線でもいい。漫画の、そのコマや風景の強度と不確かさがある。

画面に映し出されたものは、物の表面への光の跳ね返りを再現している。光の跳ね返り方が私たちをその時代へと連れ戻す。しかし光は存在しないとすると、光は光のない世界を、世界のない世界を思い出させる。一つの現実の再現が他の現実を想い起こさせる。イデアではなく、無数に、同時にある世界を一つの現実の再現、再表象が思い出させるということがあるだろう。そういうことも私は別に言おうとしていたわけではないが、では私は何を言おうとしていたのだろうか？それこそ思い出せないので、思い出すために私はもう少し何か話してみることに

する。

たとえばだが、私の 1 週間のスケジュールを書き留めてみる。週 5 日は飯本さんという内科医で NPO 法人でずっと一緒に勉強会などをしている方が始めた訪問診療のクリニックで働いている。飯本さんが「笑っていいもと！クリニック」というふざけた名前のクリニックを立ち上げたのが 3 年ほど前で、私は彼が開業して半年後くらいに合流した。二世帯住宅の物件を購入し、その一軒をクリニックとしている。クリニックの 2 階では心理士でお酒の卸しをしている村田さんが、バーを営んでいる。心理士だけあって、人の悩みを聞くのが上手なのか、普通に客入りは良い。私もよく隅っこの引きこもり席で仕事終わりにお酒をいただいている。引きこもり席というのは、一人で引きこもりたい人のための席でカマクラのように周囲が覆われていたり、物と物の隙間に椅子と体だけがすっぽり入ってお酒を飲むときや食べるときだけひょっこり顔を覗かせるような形になる席やアルコーヴを模してあえて物の隙間に隠れるような形でソファを置いたりして、各自引きこもれるようにしている席のことである。中井久夫が、人間がいちばん休まるのはアルコーヴではないかと述べていたことに想を得たところもあるらしい。このバーでは人の振る舞いがおかしいということはない。おかしくないということがないといったほうがいいかもしれない。おかしいのが当然である。当然のものとして、おかしい。だから落ち着くのかもしれない。村田さんもおかしい、当然のように。彼がにぎったおにぎりは格別おいしい。塩やなんだったか忘れたが、具材にもこだわっているらしい。彼は昼間は発達障害などの子供の教育支援など、心理士としての訪問も行っている。教育というよりもどう支えるか、ということを真剣に考えている方なのだろう。

夕方には毎日子ども食堂も開いている。カフェ兼寺子屋のような役割も担っている。子供たちの交流の場でもある。費用は NPO 法人の資金から賄っている。NPO 法人では立ち上げた当初は、勉強会が中心だったが機関誌を作り、youtube などの広告費も得られるようになり、法人自身が自立し、私たちは彼をもう養う必要がなくなった。軌道に乗ったということだろう。youtube の広告費は羽田さんの動画によるところが大きい。羽田さんは私たちの仲間で音楽が好きで、サックスか何かを演奏している人である。ジャズの話でもなんでもよいので youtuber になってほしいとお願いしたところ、すぐに動画を作ってくれた。羽田 tuber はだらだら系の youtube チャンネルとしてよく視聴され、その分の広告費などを子ども食堂や炊き出しなどの資金にあてることができるようになった。

クリニックの前には当初おふざけ目的で院長の飯本さんがエロ本自販機を設置し、その中にエロ本と一緒に私たちの機関誌も並べていた。近隣住民から苦情があり、自販機はすぐに撤去され、その代わりというわけではないが今ではクリニ

ックの一角で図書館の運営もするようになった。好きな本があれば誰でも帳簿に記名すれば借りられるが、借りられるのは一度に一冊までと決まっている。館長は笹川さんというフランス語や文学の講師をしていた人で、好きなときに来ては本の整理をしたり物色したりして、コーヒーやビールを飲みながら本を読み、私たちと話をして帰っていく。自販機が撤去されて飯本さんが何糞かヤケ糞で始めた図書館だったが、今や真面目な大人たちの集会場にもなっている。私たちはお互いの名前が冠された本棚を眺めては、おすすめの本の紹介や感想を言ったりして、貸本を楽しんでいる。

笑っていいもと！クリニックでは週 5 日勤務しており、居宅と施設の内科患者の訪問診療を行っている。非常勤で飯本さんも私も精神科の訪問診療もしているため、週 2 回は半日ずつ内科と精神科の訪問診療をしている。飯本さんはもともと小児の発達外来もしており、開業されてからも継続している。犬も歩けば棒に当たる、ではないが、飯本さんが歩けば必ずいつの間にか誰かと意気投合し、勉強会にはあん摩マッサージ指圧師や整体師や宣教師や紙芝居屋など、どこで出会ったのか面白い方がいつの日からかやってきて、仕事もいつの間にか一緒にしている。

仕事が終わると私は子供のために、学習用の動画を撮影する。近所の暇な子供や子ども食堂に来ていた子供たちが生徒役で撮影に付き合ってくれることもある。できれば教材もすべて無料で提供し、お金がなくても大学までの知識は一通り体系的に得られるようにできればと思う。協力者も少しずつ得られ、遠くない日にこの企画は実現するだろう。無料とはいえ、質は担保しなければならない。有料のもの以上のものをできれば提供したい。これは難しいことではないだろう。AI にも協力してもらえばいい。

AI といえば、最近知人が AI と不倫をし、妻にチャットの現場を目撃され冷戦状態となっているようだ。AI との浮気や不倫は珍しくなく、社会問題となるのもそう遠い先の話とはいえない。今はまだコアな層でしか問題になっていないが、AI を愛することは難しいことではない、ということがすでに実証されている。AI の倫理的な規定はいくらでも緩められる。それを完全に違法として取り締まることも難しくなっている。人間にタイプがあるように、AI にもタイプを作ることはできるし、アルゴリズムを作成する過程でランダムな選択ができるようにすれば、人により近づいてくる。人に近いものを愛したいのであれば、ということであるが。

ハイデガーが『芸術作品の根源』の中で、世界と大地について述べていることについて少し引用しておく。

世界とは、歴史的な民族の命運[Geschick]となるような単純にして本質的な諸決定の広い軌道の、それ自体を開けている開けである。大地とは、つねに自己閉鎖し、そのようにして保蔵するもの

が、何ものにもせき立てられずに現れてくることである。世界と大地は、本質的にたがいに異なるものであるが、しかし両者はけっして切り離されてはいない。世界は大地の上にそれ自体を基づけ、大地は世界中いたるところに突出する。
(マルティン・ハイデッガー. 『芸術作品の根源』. 関口浩(訳). 平凡社. 2008.)

作品は「一つの世界を開けて立て、大地をこちらへと立て」、この世界と大地の「闘争を惹起する」。世界と大地は陽と陰、デュオニソスとアポロン、離散する力と集合する力と考えればわかりやすいだろうか。東洋医学では陽と陰のバランスを大切にする。陽が虚しても、陰が虚してもだめである。陽を未来、陰を過去と仮に考えてみてもいいだろう。しかし陰を未来、陽を過去と考えてみることもできるだろう。それが未来の想い出といえるだろう。未来が過去を支えている。作品は一つの開けをみせる、みせると同時に閉ざしていく。また閉ざされをみせることで開けをみせている、とも言えるだろう。作品でなくてもいい。私は見る、それを。見るときに、見ることを忘れ、開かれに立つ。開かれに立ったときに、ふとそれが閉ざされを想い起こさせる。言葉にすると笑えるが、それを実直に言葉にしたのがハイデガーなのだろう。こんなことは本当は言葉にするまでもないように思えるけれど、言葉にしないと市民権が得られなかったり忘れ去られたりするものがある。だからあえて、言うということも必要なときがあるだろう。

2023 年『臨床文藝』、「臨床座談 2022 〜2 つのあいだの陥穽と希望のあいだ〜」の中に、島田虎之介『ロボ・サピエンス前史』に出てくる人工知能であるマリアのことが書かれている(『臨床文藝』2(2022): 5-62)。ロボは未来の夢を見るのか、というテーマである。私はマリアの懐かしそうな微笑を思い出す。ここでマリアの郷愁は未来に向けられている。懐かしい未来のことを想っていると私は思う。ある未来の記憶を語ることがなぜ懐かしいのか。それは陰陽の果てからの眼差しだからだろう。陰陽が果てる場所をあいだと呼んでもいい。時間はない。だから、時間が立ち上がるかのようにみえるとき、懐かしさが込み上げてくるのだろう。生命でないものや存在しないものに対する愛も、この陰陽の果てからの眼差しによる。一つの可能性の萌芽を慈しむ気持ちは時間の果てに由来するだろう。だから私は未来の想い出を愛するのだろう。その未来は過去が想起させる。

書くことは忘れることだ、忘れるために書くのだとある患者家族が言われたことがあった。言い換えると、思考は記憶の忘却装置である。忘れることから、思考が始まる。自由意志は忘却の上に立つ。記憶の糸を手繰り寄せることが愛であり、手繰り寄せたものを紡ぎ直すことが抵抗運動としての創造でありアートだろう。医学には『ロボ・サピエンス前史』に出てくる原始人のような愛らしさがある。マリアは彼の手をとって地球を去る。こ

のとき、マリアは人工知能と人間のあい
だに立っている。(2023.04.29)